

二〇一九年度 光華講座 特別企画公開シンポジウム

主催者挨拶

真宗文化研究所名誉所長

一 郷正道

みなさんこんにちは。真宗文化研究所主催の「光華講座」において特別なシンポジウムを企画いたしましたところ全国から、遠近より、このように多くの方々のご参加を得られましたこと、本当に有り難いことだと感謝を申し上げる次第でございます。

今日のテーマは「仏教看護を考える」ということでございます。ひよっとしたら皆さまがたにとつては、違和感を覚えるようなテーマじゃなかるうかなと思います。と申しますのは、本学が看護学科を設立してもう九年になるのですが、それ以後、看護学科は非常に増えましてですね、全国今や二七〇前後の看護学科があるようでございます。ですが、「仏教看護」というものを標榜した看護学科というものは、まず本学だけでなかるうかと思えます。本学が「仏教看護」を標榜しまして、看護学科を設立しましたときに、マスコミの方々がやってきましてね、こんな質問を必ずするのですよ。「看護師さんは生きた人を相手にするでしょ」と、「仏教というのは死んだ人を相手にするでしょ」、「これは大変な矛盾じゃないですか?」。そういう質問を私はいつも受けました。

そのたびに、いや、あなた方の理解のほうがひどいよ、ということを申しました。日本仏教の歴史をみましても、聖徳太子が仏教を導入されたと言われていますけれども、そのときに聖徳太子がなにをなさったのかというと、まず最初になさったのは、医療機関の設立ですよ。施薬院だとか、そういうものがまず作られたわけでございますから、仏教と医療の関係は日本仏教の歴史においては表裏一体なものであったというように思うわけです。そのようなことを答えたのですが、やはり、どうも世間のみなさまの納得はまだいただいていないのではないかなということをおもいます。

当時、私がこのような仏教看護学科にしなきゃいけないということを思いましたのは、実は、本学がご案内のように、仏教精神に基づく女子教育を建学の精神にしているわけですね。仏教精神とは何かと一言で言いましたら、智慧と慈悲とその二つからなるわけでございますが、特にその実践的な面においては慈悲の精神というものが発揮されなければならないだろうと私は思っているわけでございます。慈悲というのは仏教でいちばん大事な言葉の一つでございますが、もつと具体的に、今の日本語で言うならば、「寄り添う心」あるいは、「思いやりの心」「他者への配慮」といったことが、仏教の慈悲の内容だと言って間違いないだろうと思うわけでございます。私の頭に浮かんだのはターミナルケアの現場です。明日の命もわからない患者さんがそこに横たわっておられる。この患者さんに寄り添えるのは、家族が一番身近な存在でしようけれども、ご家族の方といえども四六時中、その患者さんに接しているわけにいかないですね。そうすると、物理的にも、一番身近にいて、一番お世話をしてくださるのは看護師さんですね。その看護師さんがどのような態度、言動を取るかということとは非常に大きな問題でございます。長い経験に基づいていろいろとおっしゃること、あるいはまた、高度な専門知識をもってそういう患者さんのケアをなさること、これは非常に尊いことではありますけれども、現実問題として大

事なことは、一言もしゃべらなくてもいいから、その明日の命もわからない患者さんにほんとうに寄り添っていただけるような、そういう看護師さんを本学は育成するのだという、それが、我々の信念でございます。一言もしゃべらないということはむしろ大変なことでありまして、我々は言葉に出すほうが案外、易しいのですけれども、それをしないで、本当に一言もしゃべらなくてもいいから、手を握ってずっと寄り添ってくださるような、それのできる、そういう看護師さんを本学は養成したいと思つて、それで出発したのがこの「仏教看護」、本学の「仏教看護」の趣旨でございます。それ以後九年経ちまして、諸先生方のご協力と、今回パネリストとして参加してくださる大変著名な方々のご援助を受けてまして、これまで「仏教看護」の教育をつづけてくることができたとを非常に有り難いことだと思つております。

極言しますなら、看護は「仏教看護」でなければいけない、というくらいに私は思っている次第でございます。今日はこれまでのいろいろの成果を踏まえて、パネリストの方々のご意見を拝聴しながら、さらに会場の皆様方からの貴重なご意見を賜つて、さらに本学の看護学科が進歩、発展することを念じまして、改めて、今日このように多くの方にご賛同いただきましたことに感謝を申し上げます、一言挨拶にかえさせていただきますと思います。